

国語科教育における論理的思考力育成に関する一考察 —小学校の説明文・意見文教材を中心に—

船 所 武 志

国語科教育において、論理的思考力と同時に論証的思考形式による言語表現力の獲得が求められている。小学校国語教科書の説明的文章を一覧すると、どのような論理的思考力が育まれているのかがある程度見えてくる。論説文・意見文といった読解、表現教材には、どのような構成形態の文章が提示され、一方で、要求されているのか、を調査、検討する必要がある。グローバル化しつつある教育内容に見合った教材が模索され、指導法が検討されつつある。そうした実態とこれからの国語科教育のあり方について、提言を行うものである。

キーワード：国語科教育指導法、読解力、論理的思考、説明文、文章構成法

はじめに

平成10年の学習指導要領の改訂の時期には、国語教育の学会でもコミュニケーション言語にウェイトをかけた論議がなされたが、OECDのPISA調査に端を発して、国語科教育において、思考力・論理力、加えて表現力の育成が求められるようになってきた。平成20年の学習指導要領では、そうした論議を踏まえて改訂がなされた。理論と指導法をめぐるのは、今なお、模索が続いている。本稿では、説明的文章、とりわけ論説文にみられる構成形態の典型が意見文をはじめとする作文指導においても、スタンダードとなっている状況を示すとともに、グローバル化する教育の現状から、意見文の構成形態を改めて考察することと、説明文教材との連関を図ることへの提言を行うこととした。

1. 説明的文章の特徴

国語教育では、文章を「文学的文章」と「説明的文章」とに大きく分かつことがある。前者は、物語・小説の類であり、後者は、狭義の説明文から論説・評論の類を含めて幅広い領域に跨ったものである。大内（2011）の「説明文」の定義では、「ある物事の成り立ちや仕組みを、その物事に関して未知な読み手に対してその理解を得るように一定のものの見方・考え方から説き明かして伝える文章のことである」と述べている。説明文の概念は、「記録文、報告文、解説文などかなり重な」り、また「論説文の概念とも重なるところがある」と説明している。「論説文」に関しては、船所（2011）に次のような記述がある。

「論説文」とは、話題として取り上げることがらに対する筆者の考えを論理的に説明して、その正当性、妥当性を論証し、読者に同意を求める文章である。対立する考えを取り上げ

て、比較対照することにより説得力を増す。意見の表明に主眼を置いた文章が「意見文」、書式・書類としての体裁に着目すると「意見書」である。新聞などで、社の見解が表明されるものが「社説」である。「コラム」は、論説・評論的な文章から随想・エッセイ的な文章まで幅がある。「評論」は、主観的な価値判断（美醜、好悪、善悪など）に基づく評価が際立つ。批判的考察を行い、対象の価値を評価するのが「批評」である。

「論文」は、話題としてとりあげるものごとについて、論議する文章で、「議論文」ともいう。また、事理を探究し、論理を究明する文章である。とくに、学術的な研究水準の成果を盛り込んだものを「学術論文」という。教育上、課される数百字から千数百字程度のものを「小論文」という。

土部（1990）には、「論説文」は、「ものごとについて定立した見解を、客観的に根拠づけ、すじみちだてて論証し、その見解の正当性を認定させようとする文章」であるとされている。「論説文」の基本的な表現機能は、「論証する」ところにあり、真偽判断に基づく解釈が際立つ。

こうした論説文を含めて、「説明的文章（広義・説明文）」と総称されている。小学校の国語科教育においては、説明的文章の全容を学習するわけではなく、低学年にみられる説明文では、身の回りに存在する事物の説明を行うものから、高学年に至っては、「論説文」と明記される教材が散見されるようになり、作文教材にいたっては、「意見文」作成が要求されるようになる。「評論」や「批評」の類は、中学校から高等学校に委ねられている。

本稿では、小学校国語科教科書にみられる読解教材としての「説明文」がどのように配列され、論理的思考のどのような面の獲得が期待されているのか、また、作文教材としての「意見文」では、どのような思考に裏付けられた文章構成をとることが期待されているのか、を考察して、国語科教育の指導法における課題を探りたいと考える。今後に向けた提言も盛り込むことになろう。

木下（1981）に、日本の作文教育について、次のような記述がある。

私の考えでは、日本の学校における作文教育は文学に偏向している。遠足についての作文は、「どこに行って何をし、何を見たか」がどれだけ正確に、簡潔に書けているかによってではなく、書いたこどもの、またその仲間の心情の動きがどれだけ生き生きと描かれているかによって評価される。学校の先生のそういう評価が、世間の人々の〈いい文章〉の概念を支配するのは当然だろう。前節の終わりで私が、いい文章というとき多くの人は「人の心を打つ」ような文章を思い浮かべらるだろうと書いたのは、この推測にもとづいている。こういう作文教育もあっていいと思う。しかし私は、そのほかに、正確に情報をつたえ、筋道を立てて意見を述べることを目的とする作文の教育——つまり仕事の文書の文章表現の基礎になる教育——に、学校がもっと力を入れるようにならなければならないと考える。

木下（1981）では、心情中心の作文から情報・意見を中心とする作文への重要性が説かれている。コミュニケーション能力に加えて、論理的思考力の育成に焦点があたるようになった今日、改めてこの記述の重要性に気づかされる。現在、日本の作文教育のあり方が、描写性を重んじた「行動・心情描写の作文」から論理性を重んじた「思考・意見表明の作文」へと、高学

年になるにしたがって、説明・論証性が重んじられていることとも合致している。コミュニケーション能力と論理的思考力との関係について、小田（2013）は、国際化社会に必要なコミュニケーション力として、次のように述べている。

国際化社会に必要なコミュニケーション力は、伝えたいことを相手にわからせるだけでなく、相手を納得させる力を持った言語表現力である。その表現をかなえる論理的思考は自分の考え・主張を、それが成りたつ根拠をあげ、理由をつけて述べる論証の思考形式をとる。

小学校6年生の「意見文」の到達目標がここにあると考えられる。とりたてられた話題に対して、自らの考え・主張を表明し、客観的な根拠を挙げて、理由づけをして読み手を説得する。

2. 6年生の「意見文」作成指導—各教科書出版社の場合—

6年生の国語科教科書では、（表1）に示したように、「意見文」の作成指導を各出版社が掲載している（平成23年発行教科書）。文章構成を中心に見わたすと、その内容には幅があり、異なりがある。各出版社の内容を検討してみよう。

（表1）6年生の国語科教科書にみる「意見文」作成指導

出版社	「意見文」作成指導の箇所	該当ページ
学校図書	文章構成の効果を考える① 文章構成の効果を考える②	上 p60～p63 下 p 96 ～ p 99
教育出版	意見文を書こう	下 p 20 ～ p 23
三省堂	説得力のある意見	p 160 ～ p 167
東京書籍	「わたしの意見」を書こう	上 p 70 ～ p 75
光村図書	③ 意見文を書こう。（「平和」について考える p 84 ～ p 97 に含む）	p 94 ～ p 95

学校図書は、6年生の上・下で「文章構成の効果を考える」①・②を掲載している。6年上の①では、「自分の考えや意見をまとめる文章（意見文）」を書く際に、「読み手に、自分の言いたいこと（主題）が、しっかりと伝わりましたか」と問いかけている。〔1 基本の型〕に「初め・中・終わり」を挙げて、「初め」は「問題を提起する。」とし、「中」では、「意見を提示し、根拠となる事例を書く。」「終わり」では、「意見をまとめる。」としている。〔2 主題のある場所による文章構成の型〕では、名称は使用せず、図のみで、頭主型・尾主型・双主型の3種が示されている。したがって、基本の型は、尾主型となることが理解される。6年下では、「論の進め方」として、〔1 表現の順番〕と〔2 いろいろな述べ方〕とに分かつ。〔1〕では、名称こそは使用しないが、「帰納法」と「演繹法」とを具体例で示している。〔2〕では、具体例として、例1では、「事実A／事実B／推論／結論」、例2では、「主張／根拠／事例／反論／結論」という「考えの述べ方」を提示している。例2において、双主型を示すことになる。

教育出版は、6年下で、「意見文を書こう」と題して、「序論（課題提起）」・「本論（意見の根拠、具体例）」・「結論（意見）」を提示して、具体的な〔構成表の例〕を示している。明らかに「尾

主型」の文章構成である。構成表では、「はじめ・中・終わり」ということばも使用している。特に、具体的に文章をどのように組み立てるか、といった点に力点が置かれている。「言葉と考えを図に表す」では、「1 発想を広げる（課題を見つける）場合」と「2 構成を考える（論理を組み立てる・整理する）場合」とに分けて、身近な課題として、「放置自転車」の問題を例に挙げている。

三省堂は、「説得力のある意見」と題して、5項目を挙げている。すなわち、「①意見の中心を明確にする」、「②意見に説得力を持たせる」、「③効果的な組み立てを考える」、「④読み手に伝わるように書く」、「⑤ふり返る」である。注目すべきは、「③効果的な組み立てを考える」の組み立ての例である。項目のみ列挙すると、「意見のきっかけとなった経験」「問題の現状・調べたこと」「問題の解決策」「解決策の具体例1・2・3」「まとめ」である。①で、「伝えたい意見をまず一文で書き表しましょう。」として、「ごみを減らすために、一人一人が生活の中でできることから始めることが大切だ。」との例を示し、③の「まとめ」に位置づけられている。典型的な課題解決型の組み立てで、「尾主型」の構成をとることになる。

東京書籍は、「かたかな言葉の問題点」を話題とする意見文の構成と具体的な文章を挙げている。注目すべきは、意見文の構成で、項目を列挙すると、「自分の意見（どんな問題に対して、どのように考えたか）」「意見の理由や根拠」「予想される反対意見と、それに対する反論」「自分の意見（まとめ）」である。具体的な意見文の文章においても、冒頭の形式段落で、「ほくは、たくさんの人に伝えたいことは、なるべくかたかな言葉を使わないほうがよいと思います。」と述べ、末尾の形式段落で、「ほくは、たくさんの人に伝えるときには相手が分かる言葉を選ぶようにして、かたかな言葉を使うときは説明を加えて分かりやすくするべきだと思います。」と述べている。冒頭、「使わないほうがよい」と述べ、予想される反論も踏まえて、「使うときは説明を加えて分かりやすく」と言い換えている。初めの見解を最後に再び角度を少し変えて繰り返すという述べ方である。初めと終わりに意見を明示する典型的な「双主型」の構成をとる意見文である。

光村図書は、「『平和』について考える」の単元の中で、①「平和のとりでを築く」（大牟田稔）を読み、自分の考えをもつ。②自分の考えを確かにするために調べる。③意見文を書く。④スピーチをする。という活動の流れを設定している。〈意見文の例〉として、「私にとっての『平和』」という文章が示される。また、〈意見を述べる文章の構成例〉が同頁に記載されている。すなわち、「1 意見／2 根拠となる出来事など／3 予想される反論と、それに対する考え／4 意見のくり返し」である。具体的に示されている意見文では、「自分自身が決して暴力をふるわないこと。身近なところから暴力をなくすこと。わたしは、これが『平和』への第一歩だと考える。」という叙述内容が冒頭と末尾とに繰り返されている。①の「平和のとりでを築く」は、典型的な尾主型の文章構成であるが、意見文の例は典型的な双主型の文章構成である。

「はじめ・なか・おわり」という文章の構成は、文章というものを捉えやすくして「三段構成」を意識させることに役立つ。各段の機能を名称に反映させるならば、「序論・本論・結論」ということになるが、「尾主型」の典型を示してもいる。5社のうち、3社が「尾主型」を推奨している。そのうちの1社が「双主型」も示している。他の2社は、「双主型」を推奨している。

現行の国語科教科書では、「尾主型」と「双主型」とが拮抗しているかのように見えるが、「尾主型」は、伝統的な文章構成の「起承転結」流れを汲むものと思われる。一方、「双主型」は、たとえば、渡辺（2004）などに紹介されているように、アメリカの教育にみる「因果律」の説明スタイルが、日本の国語科教科書にも影響を及ぼしているものとみられよう。いずれかの文章構成をとらなければならないのではなく、時や場合に応じて、必要で効果的な文章構成が選択できることが大切であろう。「因果律」の説明スタイルを取り込む「双主型」の文章に関しては、「意見文」の作成指導段階ではなく、早い段階（たとえば中学年）から、その習得に心がけなければならないのだろう。「書くこと」の学習だけでなく、「読むこと」の指導との関係において、配慮が必要であると思量する。

3. 小学校国語科教科書の説明文教材

国語科教科書は、5社。学年を上・下巻の2分冊とする出版社と1冊にまとめている出版社とがある。説明文教材の一覧を（表2）に示す。光村図書は、各教材に（説明文）という表示をしていない。ほかの出版社でも、1年生上巻の教材では明示していない。6年生教材では、（論説文）という表示がなされる教材もある。一方では、その論説文が他社で（随筆）と表示されることがある。名称規定の難しさがあることがわかる。また、教材名の後の丸括弧（ ）は筆者名を記した。筆者名のないものは編集者によるものである。

1・2年の低学年教材にみられる特徴としては、話題に、身近な事物、もしくは動物・植物が取り上げられていることが指摘できる。事物の認知から、同種のものの比較、機能（役割）、客観的な事物の認知とその複数の事物比較によって差異性と共通性との把握、知恵・工夫や仕掛けに気づくことで、論理的思考への導入が図られる。河野（2013）では、低学年のコミュニケーション能力の発達について「『事実』を明確に捉える力が育つと、そこに『理由づけ』（事実の解釈・推論）がなされるようになる。」と説明している。

3・4年の中学年教材にみられる特徴としては、題名に「AとB」、「～のひみつ・なぜ・手がかり」、話題となっている事物の因果関係が認識されるようになる。中学年のコミュニケーション能力の発達として、河野（2013）で「論証自体が構造化されるようになる。」という。読解教材にも、そうしたコミュニケーション能力の発達と相応する要素が認められるといえよう。

5・6年の高学年教材にみられる特徴としては、動物の生態、自然環境の保護、メディア・リテラシーといった自然のすがたと人類の暮らしとの総合的なとらえ方がなされている。高学年のコミュニケーション能力の発達について、河野（2013）は、「高学年では、事実の解釈・分析を通して、いくつかの代表例をもとに一般化を行う推論、さらに種類を異にする二つのものごとの間に類似した関係があることを利用した推論（類推思考）の強化も必要となる。」と述べる。ガラパゴス、イースター島、江戸といった時空を越えた話題にも、一般化や推論（類推思考）が働くために、いま・ここ・われの現代という時代を生きるための糧を得ることができるのであろう。分析・統合・組織化する論理的な思考力を発揮することができるよう、説明的文章教材が配置されているとみることができる。

文章構成という観点からは、話題の提示からはじまり筆者の見解は末尾に置かれるというパターンである。論説的な文章になると、課題提示がはじめになされ、課題の解決とともに筆者の見解・主張が末尾に置かれる。総じて、「尾主型」の文章が説明文教材として提示されている。「双主型」の意見文作成教材の直前にも、「尾主型」説明文が置かれている。

(表 2) 小学校国語教科書の説明文教材一覧

年	学校図書	教育出版	三省堂	東京書籍	光村図書 注*
1 上	いきもののあし*	だれが、たべたの でしょう*	しっぽしっぽ (ほ りひろし)*	どうやってみをま もるのかな*	くちばし* みいつけた
	くらしをまもる車	はたらくじどう車 みぶりでつたえる (のむらまさいち)	ぼうしのはたらき (よこやまり)	いろいろなふね 歯がぬけたらどう するの	じどう車くらべ* どうぶつの赤ちゃん* (ますいみつこ)
2 上	はたるの一生 (さ さきこん)	すみれとあり (や ざきよしこ) 鳥のちえ (ひぐち ひろよし)	つばめのすだち (もとわかひろじ) たねのたび (なか にしひろき)	たんぽぽ (ひらや まかずこ) ふろしきは、どん なぬの	たんぽぽのちえ* (うえむらとしお) どうぶつ園のじゅ うい*(うえだみや)
	あいさつのみぶりとことば ゴムでうごくおも ちゃのしくみ	さがが大きくなる まで きつつき	紙パックで、こま を作ろう (いまい みさ)	ビーバーの大工事 (ながかわしろろう) 虫は道具をもって いる (さわぐちた まみ)	しかけカードの作 り方*(ふるうちひ かる) おにごっこ*(もり したはるみ)
3 上	にせてだます 合図としるし	めだか (杉浦宏) 森のスケーターや まね (湊秋作)	米と麦 (吉田久) 「農業」をする魚 (新田末広) 身ぶりはたらき (東山安子)	自然のかくし絵 (矢島稔) 「ほけんだより」 を読みくらべよう もうどう犬の訓練 (吉原順平) 人をつつむ形―世 界の家めぐり (小 松義夫)	イルカのねむり方 (幸島司郎) ありの行列 (大滝 哲也)
	ミラクル ミルク (中西敏夫) 冬眠する動物たち	くらしと絵文字 (太田幸夫) どちらが生たまご でしょう 広い言葉、せまい 言葉 (福沢周亮)			すがたをかえる大 豆 (国分牧衛) かるた (江橋崇)
4 上	むささびのひみつ あめんぼはにん者 か (日高敏隆)	アーチ橋の進歩 (小山田了三) とんぼの楽園づく り (森清和)	打ち上げ花火のひ みつ (冴木一馬) 月のかけ絵 (藤井 旭) じゃんけんの仕組 み (加藤良平)	ヤドカリとイソギ ンチャク (武田正 倫) 広告と説明書を読 みくらべよう	大きな力を出す (西嶋尚彦) 動いて、考えて、 また動く (高野進)
	手で食べる、はし で食べる (森枝卓 士) 点字を通して考え る (黒崎恵津子)	花を見つける手が かり (吉原順平) 「便利」というこ と (太田正巳) いるかのひみつ (倉橋和彦)		くらしの中の和と 洋 「着るロボット」 を作る (小林宏)	アップとルーズで 伝える (中谷日出) ウナギのなぞを追 って (塚本勝巳)

5	和紙の心（町田誠之）	言葉と事実（福沢周亮） 森林と健康（谷田貝光克）	「十秒」が命を守る（松森敏幸） 動物の「言葉」 人間の「言葉」（池上嘉彦） コウノトリが教えてくれた（池田啓）	動物の体と気候（増井光子） 新聞記事を読み比べよう 森林のおくりもの（富山和子） テレビとの付き合い方（佐藤二雄）	見立てる（野口廣） 生き物は円柱形（本川達雄） 天気を予想する（武田康男） ゆるやかにつながるインターネット（池田謙一） ニュース番組作りの現場から（清水建宇）
下	くり返しのはたらき（熊谷智子） 新聞の読み方を考える くじらから世界が見える（白石ユリ子）	ブナの森が支える豊かな自然（斎藤宗勝） 白神山地の自然保護―「緩衝地帯」の役割―（牧田肇） まんがの方法（石田佐恵子）			
6	自分の脳を自分で育てる（川島隆太） 江戸のファーストフード（大久保洋子）	日本語をコンピュータで書き表す（近藤泰弘） さるは「ココ」と鳴いていた（山口仲美）	宇宙時代を生きる（野口聡一） 「なべ」の国、日本（渡辺あきこ） 二十一世紀に生きる君たちへ（司馬遼太郎）+	イースター島にはなぜ森林がないのか（鷲谷いづみ） 新聞の投書を読み比べよう 未来に生かす自然のエネルギー（牛山泉） 雨のいろいろ（倉持保男） 数え方でみがく日本語（飯田朝子）	感情（茂木健一郎） 生き物はつながりの中に（中村桂子） 柿山伏について（山本東次郎） 平和のとりでを築く（大牟田稔） 『鳥獣戯画』を読む（高畑勲）
下	メディア・リテラシー入門（池上彰） 世界危機遺産ガラパゴス（藤原幸一）	ぼくの世界、きみの世界（西研） 人類よ、宇宙人になれ（立花隆）* 二十一世紀に生きる君たちへ（司馬遼太郎）*			

【表中、紙幅の都合で、低学年の分かち書きはしていない。注*：光村図書は、（説明文）という表示をしない。*：（説明文）という表示をしていない教材。*：（論説文）の表示。

+：他社では（論説文）表示がなされるが、（随筆）の表示。】

4. 構想の種類―論理的文章の構成法を中心に―

土部（1976）では、「構想の種類」として、「一 話題・主題の設定パターン」と「二 題材・趣意の展開パターン」とを挙げている。一は、更に、「1 主題文を設定する構成」「2 話題文だけを設定する構成」「3 話題ないし主題をひそませる構成」の3種に分類している。話題・主題の設定のしかたが文章の構成法に大きく関与することが指摘されている。一方、二については、次のように述べて具体的な展開パターンを示している。

「構想」ないし「構成」は、「話題」ないし「主題」の展開過程のしくみである。「話題」ないし「主題」の展開過程は、〔A〕「ものごと」やその「とらえかた」「しかた」のありように即し、〔B〕読み手に対する「期待のしかた」のありように応じて、しくまれる。として、基本的な展開パターンをとりたてている。この〔A〕・〔B〕に関する構成について、以下に引用する。

〔A〕「ものごと」やその「とらえかた」「しかた」のありように即した構成

（1）「ものごと」のありよう（事物論理的構成）に即した構成

- ①時間的経過に即した構成／②空間的配列に即した構成
- (2)「ものの見かた・考えかた」のありよう（思考論理的関係）に即した構成
 - ③同類・異類の関係に即した構成／④主要・副次の関係に即した構成
 - ⑤全体・部分の関係に即した構成／⑥理由・帰結の関係に即した構成
 - ⑦一般・特殊の関係に即した構成／⑧肯定・否定の関係に即した構成
- (3)「ものごとのしかた」のありよう（実践論理的関係）に即した構成
 - ⑨課題・解明の関係に即した構成／⑩成果・方法の関係に即した構成
- (4)「こころの動きかた」のありよう（心理的關係）に即した構成
 - ⑪事態・評価の関係に即した構成／⑫印象・心情の推移に即した構成
- 〔B〕読み手に対する「期待のしかた」―「読みやすさ」のありように即した構成
 - (1)興味の深いものごとから述べる（関心度に即した）構成
 - (2)必要にせまられているものごとから述べる（必要度に即した）構成
 - (3)よく知られているものごとから述べる（知名度に即した）構成
 - (4)うけいられやすいものごとから述べる（親密度に即した）構成
 - (5)やさしいものごとから述べる（安易度に即した）構成

文章構成の基本的な展開パターンの〔A〕を中心に、小学校の説明文教材に採用することが可能ではないかと思量する。「事物論理的構成」に即した構成は、特に、低学年に顕著に現れる。すなわち、時間的経過、空間的配列による事物の提示がなされる。低学年にのみ限ったことではないが、低学年においては、時間的経過、空間的配列による事物の認知・認識が必要である。低学年から中学年にかけては、仕組み、仕方、作り方といった「実践論理的関係」の成果・方法の構成に即した構成が表れる。さらに、中学年からは、課題・解明の構成に即した構成も認められる。中学年から高学年にかけては、「思考論理的関係」に即した構成が顕著になる。同類・異類の関係／全体・部分の関係などは、低学年からも見受けられる。高学年の論説文・随筆の類では、「心理的關係」（事態・評価の関係／印象・心情の推移）に即した構成が認められる。

〔A〕の「ものごと」やその「とらえかた」「しかた」のありように即した構成は、学年が上がると順次出現するものではなく、複数の構成形態が複合して、特に「思考論理的関係」の③から⑧は徐々に高度な構成形態をとりながら複合的に表れる。複雑な構成形態をとる一方、〔B〕の「読みやすさ」のありように即した構成が緩和することになる。安易度、知名度、親密度、関心度、必要度の順で、低学年教材から関係していくと思量する。

5. 小学校1年の説明文教材「いろいろな ふね」の一授業法―論理的思考力を育む―

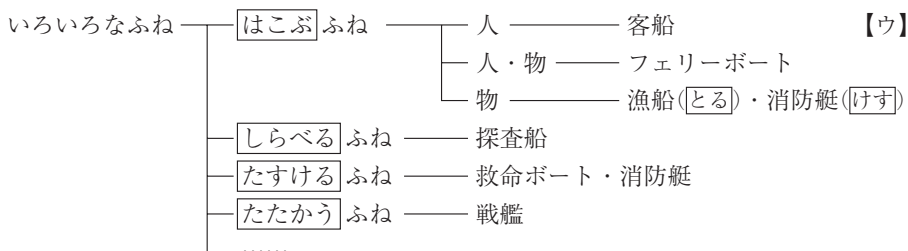
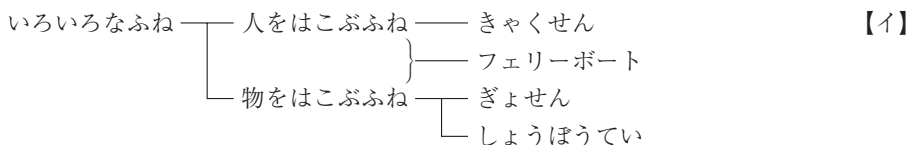
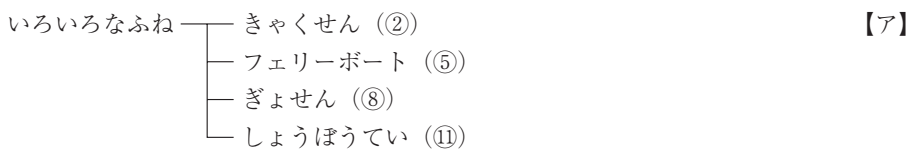
東京書籍の「あたらしい こくご 一下」（平成23年版）には、説明文の『いろいろな ふね』が定番として扱われている。文番号（①、②、…）を付して以下に示す。一文一段落の叙述で分かち書きである。

- ①ふねには、いろいろな ものが あります。
- ②きゃくせんは、たくさんの 人を はこぶ ための ふねです。

- ③この ふねの 中には、きゃくしつや しょくどうが あります。
- ④人は、きゃくしつで やすんだり、しょくどうで しょくじを したり します。
- ⑤フェリーボートは、たくさんの 人と じどう車を いっしょに はこぶ ための ふねです。
- ⑥この ふねの 中には、きゃくしつや 車を とめて おく ところがあります。
- ⑦人は、車を ふねに 入れてから、きゃくしつで やすみます。
- ⑧ぎよせんは、さかなを とる ための ふねです。
- ⑨この ふねは、さかなの むれを 見つける きかいや、あみを つんで います。
- ⑩見つけた さかなを あみで とります。
- ⑪しょうぼうていは、ふねの 火じを けす ための ふねです。
- ⑫この ふねは、ポンプや ホースを つんで います。
- ⑬火じが あると、水や くすりを かけて、火を けします。
- ⑭いろいろな ふねが、それぞれの やく目に あう ように つくられて います。

文章の特徴として、総叙（総括的叙述）と細叙（細密的叙述）とに分かたれる。①・⑭の総叙に対して、②から⑬までの細叙である。「ふねには、いろいろなもの…」(①)と「いろいろなふねが…」(⑭)との額縁構造が取られる。文章末尾⑭文は、「それぞれのやく目にあうように…」と個別事象の差異性に着目しており、文章全体の総括として位置づけられるものの、その具体は②から⑬に述べられている。一般・特殊の関係に即した構成でもある。この②から⑬においても総叙と細叙とが存する。すなわち、②－③・④、⑤－⑥・⑦、⑧－⑨・⑩、⑪－⑫・⑬である。総括的な船の紹介と具体的な船の特徴が語られる。4種の船は、並列的に羅列されている。事物論理的構成で空間的配列がなされている。その特徴から、人を運ぶ船と物を運ぶ船とである。フェリーは双方の特徴が兼ね揃えられて位置づけられる。すなわち、思考論理的関係においては、同類・異類の関係に即した構成である。読み手に関しては、知名度・関心度に即した構成である。

教材文は、【ア】のように具体的な船を羅列している。それをどういう仕事をする船かでまとめると【イ】のような表に表すことができる。さらに、一語の動詞で船の特徴を言い表わすとすれば、括がりのある船の分類が可能となる【ウ】。一般・特殊の関係、同類・異類の関係に即した構成をより確かに認識しうる学習が生み出せる。小学校1年生にも可能な論理的な思考力育成に繋がる授業となる。



6. 新聞コラムの主題・構成・叙述—「天声人語」2008.11.9を例に—

2008年11月9日の朝日新聞朝刊「天声人語」は、緊密な構成と多彩な叙述法によって、筆者の意見が明確に表明された文章で、多くの読み手に深い感動を与える。以下に、便宜上、段落（Ⅰ、Ⅱ…）・文番号（①、②…）を付して記す。

- I ①「黄金の三角」といえば、インドシナ半島の麻薬密造地帯をさす。②ことはど左様に、美しい言葉が美しい事物を表すとは限らない。③字句の美しさゆえに、現実の醜さが際立つこともある。
- II ④1938年の晩秋、ドイツ全土でユダヤ人街が襲われ、多くの死傷者が出た。⑤路上に砕け積もったガラスのきらめきから「クリスタル・ナハト（水晶の夜）」の名で現代史に刻まれる。⑥ナチスが扇動した事件から、今夜で丸70年になる。
- III ⑦以後、ユダヤ人迫害は強制収容へと加速していく。⑧ドイツが侵攻したポーランドのユダヤ人350万人の一部は北に逃れ、40年の夏、リトアニアに達した。⑨赴任中の外交官、杉原千畝が彼らに大量の日本通過ビザを発給し、6千人の命を救った話はよく知られる。
- IV ⑩妻の幸子さん、領事館に押し寄せた難民に驚く長男とのやりとりを、自著に残した。⑪「あの人たち何しにきたの?」「悪い人に捕まって殺されるので助けてくださいって言ってきたのよ」「パパが助けてあげるの?」。⑫一瞬、言葉に詰まり「そうですよ」。
- V ⑬リトアニアはソ連に併合され、領事館は閉鎖を迫られていた。⑭千畝は撤収までのひと月、東京の命に背いて手書きのビザを出し続ける。⑮痛くて動かない腕を幸子さんがもんでいううち、眠りこける日々だったという。

Ⅵ ⑬86年に他界した千畝。⑭愛妻家としては、天国での单身もそろそろ限界だったに違いない。⑮先月、幸子さんが94歳で召された。⑯お別れの会がきょう、東京の青山葬儀所である。⑰その勇気と、あの狂気に、思いを致す一日としたい。

小学生の説明文教材としては、高度なものとなりえようが、伝統的な文章構成（起承転結）を取り、典型的な「尾主型」の文章である。新聞コラムという不特定多数の読者に対して、まずは、文章構成の基本的展開パターン〔B〕の読み手に対する配慮がなされる。それが、Ⅰの「起」にみられる。②文・③文に筆者の主観的表現が認められる。〔A〕（4）の「心理的關係」に即した構成とみることができよう。「美しさゆえに……醜さ」ということばが、読み手の関心を高める効果がある。Ⅱ・Ⅲは、Ⅰとの類推で本題に入ったことがわかる「承」である。70年前の当時の様子が掻い摘んで説明される。知名度の高い話題（杉原千畝がユダヤ人6千人の命を救ったという話）に収束させ、読み手には、主要・副次の関係／全体・部分の関係の「思考論理的関係」を気づかせることになる。Ⅳ・Ⅴは、当時の様子を、妻と長男との会話描写、そして千畝の行動描写を交えて、手に取るように再現する。事実は、妻の著述内容に入ることによって、「転」とみうる。段落冒頭の⑩文・⑬文の文末にタ形を用い、他はル形文末（直接会話の連続を含めて）であることがその効果をより高めて、緊迫感が伝わる。Ⅵは「結」として、70年とリトアニアの時空を超えて、2008年11月9日の「今日」に収斂する。⑥文だけでは、不十分であったこの文章の話題が、課題が解明されるかのように末尾で解き明かされる。Ⅵにも、⑭文・⑰文と筆者の主観が表されている。⑰文をコアとした主題文が容易に考えられよう。

まとめにかえて

「起承転結」の文章構成は、漢詩の構成法から散文にも応用されたものだが、古くは、「起承転合」ということばが、15世紀に現れるという（小学館『日本国語大辞典 第二版 第四巻』2001年）。したがって、それ以前の文章では、必ずしも文章末尾に結論が置かれているとは限らない。『枕草子』などは、冒頭に見解が表明されている。その後、「起承転結」の文章構成は、漱石の文章にも出現し、学校教育を通して浸透したと考えられる。

小学校の説明文教材が、この伝統的な文章構成法をとることに違和感を覚える者はいないであろう。しかし、グローバル化する今日、意見文の作成やスピーチでの構成法に「頭主型」もしくは「双主型」が求められるとするならば、読解教材としての説明文・論説文にも同様の構成法をとった文章を提供する必要がある。

5. の小学校1年生の教材は、極めて簡素な「双主型」の文章構成をとっている。文章末尾の表現に重きを置くならば、簡素な「尾主型」とも言う。叙述を詳細に検討して、その文章構成に着眼することが求められよう。

6. に示した新聞コラムは、典型的な「尾主型」の文章構成をとることで、その効果を発揮していると思量する。時と場合と、その叙述内容に応じた文章構成法を選択することが、〔書くこと〕においては、求められている。〔読むこと〕においても、〔書くこと〕と相応する文章の例と量とが求められるのであろう。

参考・参考文献

- 大内善一（2011）「9. 説明文」（日本国語教育学会編『国語教育総合事典』朝倉書店）
- 小田迪夫（2013）「論理的思考学習の要諦」（『国語教育研究』8月号 日本国語教育学会）
- 河野順子（2013）「論理的なコミュニケーション能力を育てる学習指導計画」（『国語教育研究』3月号 日本国語教育学会）
- 木下是雄（1981）『理科系の作文技術』（中央公論新社）
- 土部弘（1976）「構想の種類と立て方」（平井昌夫編『文章上達法』至文堂）
- 土部弘（1990）「論説・評論の表現特性」（土部弘編著『表現学大系 各論編第27巻 論説・評論の表現』教育出版センター 序章）
- 船所武志（1990）「科学的論説の表現特性」（土部弘編著『表現学大系 各論編第27巻 論説・評論の表現』教育出版センター 第二章）
- 船所武志（2011）「論説文」（中村明ほか編『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店）
- 船所武志（2013）「国語科教育における読解・思考力育成に関する一考察—小学校の説明文教材を中心に—」（四天王寺大学紀要教育学部 第55号）
- 渡辺雅子（2004）『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル—』（東洋館出版社）